

JALSG Young Investigator ASH Travel Award 2017 参加報告

都立駒込病院 永田啓人

この度は JALSG Young Investigator ASH Travel Award に御採択頂き、誠にありがとうございました。国際学会はおろか、海外渡航自体の経験が殆どない私にとっては、まず海外に一人で行くという時点で不安だらけだったのですが、参加してみて本当に有意義で自分の人生に影響を与えるような貴重な経験ができた実感しております。

本年度の ASH は 12 月 8 日～12 日にかけて、ジョージア州アトランタで開催されました。当日アトランタは稀にみる大雪であり、多くの便が欠航となったため、私もダラスに宿泊の上で当初の予定より 30 時間遅れで 9 日の夜中にアトランタに到着致しました。結局参加は後半 3 日間となってしまい、折角選んでいただいたにも関わらず誠に申し訳ありませんでした。

あまりにも広大な会場で多彩なテーマに及ぶ講演が行われており、特に急性白血病の新薬、移植治療に絞って聴講させていただきました。今年の ASH では FLT3 阻害薬、IDH1/2 阻害薬、venetoclax など特に AML において様々な新規治療薬がスポットライトを浴びていたのが印象的でした。日本では Gilteritinib や Midostaurin などようやく治験レベルで使用できるようになってきましたが、すでに Gilteritinib の耐性化機序に関わる研究が報告されていたり (No:0295)、Gilteritinib (No:0722) や Ivosidenib, Enasidenib (No:0726) を AML 初回治療に組み込んだ Phase1 試験の結果が報告されていたりと、普段論文をフォローしているだけでは得ることができない最先端の知見に触れることができました。Plenary session では進行期 HL における AAVD 療法の ABVD 療法に対する優位性の報告 (No:0006) が特に印象的であり、教科書が書きかわる瞬間を見たというような感動がありました。

ポスターセッションにも Blinatumomab や Inotuzumab など新規治療薬を使用した Phase3 試験の報告など今にも論文化されそうな重要な報告が溢れており、学会のレベルの高さに驚かされました。

レベルの高さに驚愕し、正直自分が将来このような場所で発表できるような人間になれるのだろうか不安で一杯になってしまいましたが、一方で、また来年も必ず参加したいという思いも強くなり、現在も何とか来年 ASH で発表できるネタはないだろうかと思案に明け暮れる毎日をお過ごししております。今回の経験は自分にとって本当に大きな経験になったと実感しております。最後になりましたが、このような機会をいただき、JALSG 関係者の皆様に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。